



TITLE:

天降の靈劍-建國劍：世界の至寶-流星刀(2)

AUTHOR(S):

村山, 翠溪

CITATION:

村山, 翠溪. 天降の靈劍-建國劍：世界の至寶-流星刀(2). 天界 1941, 21(238): 114-118

ISSUE DATE:

1941-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168154>

RIGHT:

天降の靈劍——建國劍 (2)

——世界の至寶—— 流星刀——

村 山 翠 溪

4. 御物流星刀

既述の靈劍の數々は(記)(紀)に載せられたる遠き上代のものなるが故に、其の詳細を知る由もない。されど、何たる神秘と因縁なるかな！ 御物流星刀こそは、眞に天降の靈劍として、科學的にも、文獻的にも、其の詳細を確實に知悉し得るのである。而も、此の種の靈劍は、地球上いづれの處にも存在しない古往今來の獨歩のものであつて、謹んで天下の至寶と稱すべきものと、信ずる。此の流星刀の由來こそ、國民として、普く、正しく知るを要する。

夫れ、晴れたる夜の天空には、常に多少の流星を見得る。之は、宇宙間に浮遊せる微塵が、引力の釣合ひを失ひ、大氣中に飛來する時に見る一の現象ともいふべきもので、“流れ星”とか、“抜け星”とか稱せられてゐる。畢竟、發光能力、反射能力もない星屑ともいふべきものが、大氣中に突入するに當つて、空氣と摩擦して熱を起し、酸素圏内に入るに及んで、燃焼して光輝を放つに至る。多くは地球表面に達せずして、熔解、燃焼、蒸發し、全く形態を失ふのである。稀に其の殘核が地上に達する。此の際、普通には秋水にも似たる光輝を發し、轟然たる音響を伴ふ。地表に達する際には空氣の抵抗を受けて、速度は比較的小となり、地表に留るか、又、地下2米位の處に埋没するかである。此の殘核、即ち流星物質には30餘の化學元素を含有するが、特に珍しきものはない。

隕星は、吾人が、地球以外の天體として、觸覺に訴へ得る唯一貴重な鏽石である。されば、古來、此の天來のものを神聖視し、迷信的に取扱はれたことは、あながち非常識なりとは斷言し難い。さて、我が國土内に天降せし隕星は、100餘が記録せられ(花山ブレテン306號参照)、中にも隕石が其の大部分を占め、隕鐵は6~7個に過ぎない。其の隕鐵中、重量の上より滋賀縣に發見された田上號タナカミを最大のものとし、既述の白萩號は第2位に位する。

(滋賀)	田上號	174. kg	(兵庫)	岡野號	4.74 kg
(富山)	白萩號	22.73kg	(岐阜)	阪内號	4.18 kg
(同)	早乙女號	10.88kg	(長崎)	福江號	0.008kg

外に石鐵のものが1個ある。

(隕石や隕鐵に關する故老の傳説には、何處も同じく、一時は外人に賣り拂

はれんとしたといふことである。事程左様に貴重といはうか、珍奇といはうかに、想像せられたものらしい。）

第2位の隕鐵“白萩號”は、其の一部を以て、御物“流星刀”が謹作せられたのである。そして其の殘部は東京科學博物館に保存陳列せられ、一般の參考用に供されてゐる。其の説明に、

“上市川隕鐵 落下年月不詳

白萩村ナル上市川ノ上流ノ砂礫中ヨリ小林一生氏發見海外ニ賣ラレヨウシトタガ榎本武揚氏ハコノ事ヲ聞キテ自己ノ所有トシタ。令嗣武憲氏學術上私スベキニ非ズトシテ本館ニ寄贈
明治二十三年四月發見”

とあり、又、同館陳列品解釋書の地學部には、

“上市川隕鐵 落下年月は不明であるが明治二十三年四月に富山縣中新川郡白萩村大字稻村の上市川の砂礫中より發見した。榎本武憲氏は本隕鐵を私有すべきでなく 遍く一般公衆の觀覽に供せんとの特志によつて本館に寄贈された。因に比重は7.88で、成分には鐵89.4%、ニッケル9.3%、コバルト7.83%を含んで居る。隕鐵の切斷面はよく光つて居て中央部の研磨面を稀鹽酸で腐蝕した所には正八面體の面に相當して線が見える。これをウイドマン・ステッティン氏の構造と言つて隕鐵の特性である。”

とあり、又、別に詳細な分析表を掲げて、混入せる外の元素の定量的説明も示されて居る。

以上の説明及解説には、疑問もあり、物足らなさを感ずるが故に、更に補足をなす所以である。

抑々、此の隕鐵は、明治23年四月、富山縣中新川郡白萩村稻、即ち上市川上流で小林一生氏が發見したものといはるゝが、一説には、同氏が、鑛山試掘中、同氏使役の坑夫中村定次郎氏が、白萩村を貫流する上市川上流の砂礫中に於て一塊の鑛物を拾得したといはるゝ。

今回、同地を訪問し、同村、久保松次郎(72)老に就て當時の記憶を聽く——同老は矍鑠、頭腦明晰、應答確實、信を措くに足る——老の話に依れば、

「今より五十年前、即ち壯年時代の事である故、確かに記憶して居るが、當部落に道林八郎右衛門(當時35歳位)氏といふ人があつた。當部落の知識と呼べるゝ程、何事もよく理解し、特に算數に秀でゝ居た。又、小林一生氏は富山市の代言人で、此の奥の山で銀銅鑛を發掘する爲に來て、八郎右衛門氏宅を事務所として、此處に起居して居た。又、今は故人であるが、道林松之助といふ人が葛芋掘りに上流の山中に往き、歸途、川中で色の變つた重い石を拾つて、八郎右衛門宅に持つて行き、珍しい石として其儘預けて置いた。恐らくそれが小林

氏の手に渡つたものであらう。」

と。又、同地某(62)の話に依ると、

「道林八郎右衛門が、葛芋掘りに行き、上流で金の音のする石を拾つた。それではなからうか」

といふ。以上の道聽途説と共に、先づ地勢上から考察するに、此の隕鐵の落下地點は、恐らく上市川上流稻附近よりも遙か上流地方であると信ずる。それは、此の邊は急傾斜の大なる溪流で、而も年々雪解、大雨の季節には、水勢頗る強く、大岩石をも容易に押し流した形跡が歴然として居る、恐らく上流の山中にでも落下したものと推定して差支がない。落下半年月不詳の所以は、人里離れた處に落ちたからである。

川中で容易に發見せられたのは、該隕鐵が表面赭黒色であり、河底は水流の爲に互に相摩擦して、球狀となつた白色の石塊で満たされて居る中に在つたからである。

次に、久保老及某老の話を綜合すると、以前より八郎右衛門氏の所藏であつたことが考へられる。併し、口碑傳説は、往々にして錯覺に陥るものであるから、再検討を必要とする。

けれども、ともかく、それが偶然にも明治23年四月に至つて小林氏に依つて發表せられたもので、該地方の四月は寒氣猶ほ去らず、氷雪も少しは残つて居つたことと思ふ。且、又、葛芋掘りの季節とも思はれない。此の點は更に、地方の人々の冷靜なる研究判斷に俟つ。序に稻部^{じやうやま}部落對岸のトロイディヤルの城山も。

顧みて雍熙正に明治の二十三にして、金鵄勳章御創定、教育勅語御下賜、第一回帝國議會召集等瑞祥に滿ちた此の歳、此の發見發表、而して此の資材に依つて榎本武揚氏が備前系の刀匠武藏國國宗をして日本刀を謹作せしめ、名も流星刀とし、後に時の東宮殿下に奉獻したる事實に想到する時、一種の靈感に打たれざるを得んやである。此の寶刀に關して、某學者の著書には「隕鐵白萩號ハ之ヲ以テ短刀ヲ作り龍星刀ト名付ケテ皇太子殿下ニ奉獻シタルコトニ依ツテ人ノ知ル所ナリ」とある。筆者の聞知する所と相違せるを以て宮内省に懇請して御回答を得た。

宮内大臣官房 第一九二號
總務課

昭和十三年四月二日

宮内大臣官房總務課長子爵 本多猶一郎閣

村山辨次殿

三月三日附御尋合ノ件

明治三十一年十二月東宮殿下へ子爵榎本武揚献上ノモノニ該當
スル様存候右及回答候也 以上

として別紙に

武藏國宗御刀

銘 表 國宗

裏 明治三十一年三月 日

表ニ「以星鐵造之」ト金象嵌アリ

長 二尺一寸五分

元巾八分五厘 先五分七厘 反四分

鑄造 直刃

白鞘

鞘書 流星刀一口 明治三十一年十二月海軍中將正二

位勳一等子爵榎本武揚 花押

明治三十一年十二月

東宮殿下へ子爵榎本武揚献上

(刀匠武藏國國宗は即ち岡吉國宗にして、此の刀劍謹作に當り、非常に苦心したことが窺はれるのは……天降の隕鐵で刀劍鍛方は從來傳授もなく經驗もなく最初試みに普通の法に依り鍛鍊せしに十分意の如くならざる故に潔齋して氷川神社に3週間の祈願して始めて着手……………したとのことである。又、研磨の際にウィドマンステッテン模様が現はれたらしく、之にも困つた様子である)

謹んで思ふに、天降の靈劍部靈は、官幣大社石上神宮の御靈代として奉祀せられ、我が民族信仰の「鎮護國家」の一大標的となり、萬人齊しく崇敬し奉り、御物流星刀は「皇基萬々載」を壽ぐ我が國民精神の象徴として、九重雲深き處に祕藏せらる。上代の傳説、現代の實相、徒に“不思議”の一語に消去する能はざるものあり。天照大神の神教にある「發展を永遠に繼續する建國の精神」即ち天壤無窮の句を畏み奉る。

5. 雜 組

富山縣の研究旅行中、早乙女號の發見地を視、又、富山市に於て舊藩士生田清堅氏祕藏の隕石を視る事を得た。未だ發表登録せられざるものである。

落下年月日 明治26年二月26日午後8時

場 所 護國神社の東北一條の道路を隔てた舊生田氏邸

發見者 生田清堅氏及令妹サダ女史

落下當時の狀況

サダ女史十六歳の時、當夜轟然たる響あり、家屋振動甚しく、屋外に出づ

れば門傾く、兄妹提灯を手にして積雪の中を求むるに門内中庭の踏石の上に異様の石塊を發見せりと。

實物は茶褐色で、一小部分を毀ちたるに粒狀のもの満つ。

又、護國神社々頭に、昭和12年冬、一大音響と共に落下したる隕石坑を視た。此の神社の境内は、生田家の所有であつたといふ。サダ女史は生田家と隕石と何等かの因縁ありと思惟せられて居る。

6. 結 言

以上は、筆者が尼崎市立商業學校生徒に通俗講演として駄辯を弄したものに過ぎぬ。又、其の梗概は二三の新聞、雑誌に通俗讀物として掲げられたものである。主觀的に客觀的に記述して、甚だしく冗長に、諄々しい。會員各位の一讀を賜はる價值を認めない。唯筆者は近時「俯して天體を視る」に轉向し、且、又、Historical Researches of Science の方角へも向ひ、それを目標にあらゆる口碑傳説を蒐集し、筐底に忘れられたる廢物を採し求め、時局柄、有効に之を活用せんと考へてゐる。かくて、新體制に順應すべき何物かを獲たいと念じてゐる。

天文逸話二題

「ねえ、プラトヘ行くことにしよう。」「まあ、何を仰有るの？ お金にするものは何も無いぢやありませんか。」これは、中世に於て、後に其の名を誦はれた大天文學者ヨハネス・ケブラの負笈遊學前の夫婦の會話である。夢見るやうな近眼で、妻を見遣り乍ら、彼はティヒ・プラトヘ大先生に火星の觀測數値を教示願はうとて、發足しようとするのである。

然し、プラトヘに師事してから、師に對し不幸な誤解を起すやうになり、ケブラは師に失禮極まる手紙を書いて、憤然プラトヘを去つたのである。

× × × × ×

バド・ヴィツの哲學の主任教授は、ガリレオの望遠鏡を覗くことを絶対に拒絶した。ピアの哲學教授は大公の前で、論理的證明を振ひ「衛星は肉眼で見える。だが、地球に何の力をも及ぼさない。だから衛星は無用なものだ。だから衛星は存在しない」と、巧みに舌の先で衛星を天空から掻き消して了つた。

1610年一月12日、小さな星が木星の右に3つ、左に1つ見えた。之れこそ、ガリレオの木星衛星の發見である。最近には、1938年七月6日、米國ウエルソン山天文臺のニコルソン博士に依つて木星の新衛星が2つ發見され、土星を抜いて11箇の子福長者になつて居る。